

花を惜しむ (福沢諭吉)

半生の 行路 苦辛の 身

幾度か 春を 迎え 還 春を 送る

節物は 忽忽として 留むれども 止まず

花を 惜しむ 人は 是れ 霜を 戴くの 人

半生行路苦辛身 幾度迎春還送春
節物忽忽留不止 惜花人是戴霜人

解説 老境に至って、がむしやらに生きてきた人生を振り返り、季節の移りかわりに無関心でなければならなかった自分の青壮年時代を惜しみ老境に至らなければ、若いときの時間の大切さに気づくものではなからう、と自らを慰めている詩。

語釈 ※半生Ⅱ生涯の大部分。半世。※行路Ⅱ人生の行路。※迎春還送春Ⅱ春は、花の咲く季節である。また、それとにも、年齢も加えてゆくのである。※節物Ⅱ四季おりおりの景色。ここでは、春の花の咲く季節のこと。※忽忽Ⅱあわただしいさま。※留Ⅱひきとどめること。※花Ⅱ梅であろうか、桜であろうか。いずれにしても、春の花をさしている。※戴霜人Ⅱ老人のこと。霜とは、頭髮に白毛の混じることである。

通釈 半世を振り返ってみれば、苦勞した身であった。その間に、何回、春が巡ってきたことであろうか。その春の景色を楽しむ暇とてないまま、季節はあわただしく移り変わってしまい、ひきとどめる術もない。春を楽しむこともなく生きてきた事を惜しんでみるものの、老境に至らなければ、その大切さに気づかない。皮肉なことに、いま、花を賞で惜しむ身はすでに白髮の翁になっているのだ。